

大友氏のルーツを探る（豊後大友氏と古荘・古庄）

大友氏は能直から始まる。能直の出自については諸説がある。鎌倉将軍源頼朝の落胤とするもの、中原親能の子とするもの、近藤(古庄)能成の実子とするもの、さらには、相模国の御家人三浦氏の一族とするものまである。これらのなかには当時の記録の明らかな誤りからくるものもあって、問題にならないものもある。しかし、では能直の実父は誰かということになると、まだはっきりとした決着はついていない。

頼朝の落胤説

大友本家に伝わる家譜や、その他の大友一族の系図類によると初代能直は、源頼朝の落胤であると記されている。また、江戸時代に杉谷宗重が書いた『大友興亡記』や『大友記』『豊後国志』などの史雑誌類にも同様のことが記されており、古くからこれが信じられている。

さて、上の諸史料によると「能直の母は、上野国利根荘出身の御家人である波多野経家(大友四郎という)の三女である利根局という人で、この利根局が、流人となって伊豆国蛭ヶ小島に流されていた頼朝に仕えて妾となり、一子を懐妊した。ところが頼朝は妻政子をはば

かり、利根局をひそかに、彼女の姉の夫である中原親能にあずけた。そして、承安二年(1173)に生まれたのが能直である。頼朝は、親能に命じて能直をその養子とし、母方の姓である大友の姓を名乗らせた」――というのである。(右系図参照)

能直や、その子親秀は、使命を帯びて京都にいたることが多かった。当時、京都で活躍した藤原定家の日記『明月記』や、摂政九条兼実の日記『玉葉』にその名が見えるが、頼朝の子らしい記述はない。さらに、当時の諸書には、頼朝落胤説を否定する記述も見い出せる。『吾妻鑑』には中原親能の子と記され、また建久元年(1190)ごろ、「古庄左近将監能直」と記したところが、四ヶ所もある。中原親能の子というところは養子の誤りで、「古庄」は、母の利根局といわれる人が嫁いだ近藤能成の姓である。能成が相模国古庄郷司であったことからその地名を名字としたもの。この事実から推して、能直は近藤(古庄)能成の実子ではなかったか



という推定が 可能となってくる。

大友氏は源姓を用いているが、これを頼朝の落胤であるからとしているが、大友氏のうちで源姓を初めて用いたのは 南北朝時代初期の氏泰からである。建武三年(1336)、足利尊氏は後醍醐天皇に背いて、九州に逃れた。このとき氏泰は忠節を尽くし、尊氏から兄弟を猶子の関係として認めるとい御教書を受けている。氏泰の「氏」は 尊氏から偏諱を賜ったもので、弟の氏時もまた同じである。これから以後、大友氏は源姓を名乗っている。すなわち、頼朝との血縁関係からではないことが知られる。

真相はどこに

能直の頼朝落胤説は伝説に過ぎないようだが、能直は頼朝から「寵愛」を受けていたことが記録に残されている。『吾妻鑑』を見ると、文治四年(1188)十月、能直はわずか十七歳で、左近将軍監に任じられた。これは「無双の寵人」として、頼朝がとくに朝廷に推挙したためであると記されている。この記事はまた、能直が正確な記録にあらわれる最初のものでもある。また文治五年の「奥州征伐」に際しては、「左近将監能直は、当時殊に近仕を為し、常に御座右に候ふ」とあり、夜は「上臥」していたとある。「上臥」というのは、貴人の寝所に当直することで、よほどの腹心でお気に入りでないえれば、叶わない重要な任務であった。このほか、能直は頼朝の他行や上洛などにも、警備の随兵として、必ず近侍している。

政子は文治二年娘を生んだ。そしてその乳母には、のち能直の養父中原親能の妻が指名されている。親能がどれほど頼朝から信頼されていたかがわかるところだ。ところが、この娘は頼朝の死んだ直後、重病にかかり、やがて、はかなくなった。姫君の遺骸は亀谷の親能の宅地内に葬られた。これは乳母という関係から、子として葬られたのであろう。以上のように、政子からも信頼された親能・能直であってみれば、政子の頼朝に妾に対する態度とは異なっていることがわかる。もし、能直が頼朝の落胤であれば、これほどの親密な関係を政子は避けたであろう。

以上、かずかずの理由からも、能直を頼朝の落胤とする説は、事実無根としかいいようがないのではないか。

では、いったい能直の本当の父親は誰だったのか。『尊卑分脈』に、藤原秀郷流の大友氏の系図がある



(右系図参照)。これをみると、近藤景頼の子に能成と頼平がいる。弟の頼平は実子ではなく猶子とある。頼平は武藤と称し、その子資頼の時から大友氏と並んで鎮西守護として九州に下り、のちの少弐氏の祖となる人である。

能成は近藤太とも、武者所ともいう。父景頼が、院の武者所に仕えたからで、景頼を「近藤武者」ともいった。能成の官途が左近将監とあるのは、さきの「波多野系図」とも一致する。『吾妻鑑』寿永元年五月の条に、「古庄郷司近藤太」なる人物が相模国金剛寺の住僧あちから、非法をしたと訴えられている。

大友氏の源流

この古庄近藤太とあるのは、系図にある近藤能成であろう。先にも記したように、能直が「古庄左近将監」と記録されていることに触れた。能直の母の嫁ぎ先が、近藤能成すなわち古庄近藤太であるならば、古庄を称する能直が近藤能成の子でないとする理由はどこにもない。

まして頼朝落胤説が否定される以上、能直の父に比定される人物は近藤能成以外には求めることはできないのではないか。『尊卑分脈』の「大友氏系図」は正しいとみるのが妥当ではないだろうか。

・参考: 大分の歴史-三巻

豊後大友氏と古荘・古庄

大友一族

豊後守護 大友氏、

大友一族 立花（近江・西大友）氏、出羽氏、入田（因幡）氏、松野氏、

大友庶家 託摩（別当）氏、元重氏、桑田氏、土居氏、

帯刀一族 帯刀氏、得永氏、久保氏、

志賀一族 志賀氏、近地氏、朝倉氏、

一万田一族 一万田氏、豊饒氏、高崎氏、

田原一族 田原氏、吉弘氏、高橋（立花）氏（一部少弐家収録）、如法寺氏、富永氏、俣見氏、国弘氏、田口氏、生石氏、

野津一族 吉岡氏、野津氏、波津久氏、佐土原氏、戸上氏、椎原氏、笠良木氏、

田北一族 田北氏、石合氏、小津留氏、城後氏、

利根一族 木付氏、利根氏、狭間氏、宗像氏（一部少弐家収録）、

古庄一族 小田原氏、古庄氏、寒田氏、坂折氏、永富氏、

大友流大神氏族 戸次氏、大神氏、臼杵氏、清田氏、藤北氏、片賀瀬氏、松岡氏、利光氏、竹中氏、成松氏、津守氏、野津原氏、朽網氏、真玉氏、
大神氏族 佐伯氏、上野氏、土持氏、賀来氏（少弐家収録）、緒方氏、秦野氏、松尾氏、阿南（波来合）氏、小原氏、大津留氏、雄城氏、木上氏、下郡氏、武宮氏、橋爪氏、安東氏、小田部氏、野津原氏、田尻氏、植田氏、田吹氏、十時（入倉）氏、由布氏、都甲氏、津島（辻間）氏、大野氏、敷戸氏、
宇佐氏族 宮成氏、吉松氏、到津氏、出光氏、山下氏、池永氏、東氏、安心院氏、奈多氏、
日田氏族 日田氏、財津氏、
清原姓氏族 長野氏、帆足氏、恵良氏、右田氏、野上氏、松木氏、
紀姓氏族 富来氏、浦上氏、岐部氏、森迫氏、
藤原姓氏族 斎藤氏、疋田氏、津久見氏、本庄氏、広瀬氏、
源姓氏族 吉良氏、渡辺氏、堀氏、
橘姓氏族 若林氏、柴田氏、
多々良氏族 平林氏、市川氏、

少弐家（武藤少弐氏、高橋氏、宗像氏、）

肥後国人衆（菊池氏、阿蘇氏、鹿子木氏、三池氏、竹迫氏、）

大内家（草野氏）

大友氏の始祖・大友能直は武藤資頼（少弐氏の始祖）の従兄弟であり、中原親能（大江広元の兄）の猶子でもありました。

武藤資頼と中原親能は共に源頼朝に仕えて鎮西奉行となりました。

武藤資頼は大宰少弐・筑前・豊前・肥前・対馬・壱岐守護職となり、

中原親能は豊後・筑後・肥後守護職となります（ちなみに薩摩・大隅・日向守護職は島津忠久です）。

大友能直は近藤能成の子で中原親能から三国守護職を譲り受けます。

大友能直の代わりに在国したのは実弟・古庄重能です。

古庄重能の子孫は大友家臣として活躍します。

大友能直の一族は豊後の大族・大神氏の諸氏に入嗣します。

それにより大神氏族の戸次・大神・臼杵・大野・野津原・朽網氏らは大友家の有力な藩屏となります。

大友一族が入嗣しなかった大神氏族の佐伯・賀来・小原・大津留・雄城・木上氏らも室町時代には大友家の有力家臣として活躍します。

彼らは大友氏の血を引いていないはずですが、加判衆や方分（守護代のようなもの）として重用されています。

ややこしいのは、豊後清原氏と豊後紀氏です。

どちらも清原房則の子孫を称していて、

豊後紀氏は、房則の養子・業恒の子孫で紀姓芳賀氏と同族と言う系図になります。

しかも、豊後紀氏の代表者と言うべき富来氏の先祖・永井祐安は、中原師元の養子になっています。

そして、業恒の子孫には、斎藤氏や在藤氏があり、この名字は斎藤実盛の子孫にも見られ、斎藤実盛の子孫の中には、永井氏と名乗る一族もあります。

大友家臣の斎藤氏の先祖は、斎藤実盛の一族という説もあり、富来氏も「実」字を使っていることを考えると、同族の可能性も出てきます。

古荘

【読み】ふるしょう,ふるそう,こしょう,こそう,こじょう

【全国順位】 6,808 位

【全国人数】 およそ 1,300 人

現熊本県である肥後の豪族、宇多天皇の皇子敦実親王を祖とする源氏（宇多源氏）佐々木氏流がある。現大分県中南部である豊後が起源（ルーツ）である、中臣鎌足が天智天皇より賜ったことに始まる氏（藤原氏）秀郷流大友氏族。

名字】 古荘

【熊本県人数】 およそ 450 人

【大分県人数】 およそ 150 人

古庄

【読み】こしょう,こじょう,こまさ,ふるしょう,ふるじょう,ふるぬし

【全国順位】 2,293 位

【全国人数】 およそ 6,500 人

現神奈川県である相模国愛甲郡古庄が起源(ルーツ)である、中臣鎌足が天智天皇より賜ったことに始まる氏(藤原氏)秀郷流。ほか宇多天皇の皇子敦実親王を祖とする源氏(宇多源氏)、小野姓横山党などにみられる。

大分県中南部にも「ふるしょう」の読みで多くみられる。大友氏下向の折に隨身し土着した模様。

【名字】 古庄

【大分県順位】 219 位

【大分県人数】 およそ 930 人

【熊本県順位】 201 位

【熊本県人数】 およそ 1,800 人

【福岡県順位】 766 位

【福岡県人数】 およそ 1,100 人

古庄氏

古庄氏(ふるしょうし)は、相模国愛甲郡古庄より起こった一族。古荘、古莊とも記載する。

フルショウ 古庄 熊本県、大分県、福岡県。神奈川県秦野市(旧:古庄)発祥。平安時代に記録のある地名。後に大分県に移る。大分県に安土桃山時代にあった。

フルショウ 古荘 熊本県、大分県。古庄の異形。福岡県久留米市篠山町が藩庁の久留米藩士に江戸時代にあった。

フルショウ 古性 神奈川県厚木市、神奈川県相模原市。古庄の異形。神奈川県中郡大磯町虫窪に江戸時代にあった。

フルショウ 古正 神奈川県中郡大磯町。古庄の異形。

フルショウ 古姓 埼玉県、東京都。埼玉県八潮市八條が本拠。同地が起源地。

※埼玉県比企郡滑川町福田の小字に古姓あり。

フルショウ 古荘 熊本県。古庄の異形。

西日本で九州に突出して古沢姓や古庄姓があるのは、鎌倉時代に頼朝の命を受けて豊後守兼鎮守府将軍に任じられた大友(旧姓古沢)能直の配下の鎌倉武士に古沢姓や古庄姓が多いことによる。この古沢姓や古庄姓は関東に戻らずに土着している。平家は滅亡したとはいえ、西国には平家に心を寄せる土豪や落武者が残っている。大友能直は、この押さえとして下向したのであろう。

一説には大友能直は九州に赴かずに、下ったのは実弟といわれる古庄重吉(古庄重能)だったという見解もある。大友家第三代の大友頼康の代になって豊後に下向した立場をとる。その一方で大分県豊後大野市大野町藤北に能直のものと伝えられる墓がある。どちらが正しいかは歴史家の手に委ねるしかない」

<http://plaza.rakuten.co.jp/yamanoha/diary/201001220029/>

■大伴氏同族佐伯氏と波多野・古沢氏姓

「佐伯氏関係の苗字の殆どが、相模の波多野一族出自のものであるが、これには疑問も残る。波多野をはじめ、以下にあげる一族は秀郷流藤原氏の猶子となった祖先をもつことで藤原姓も称するも、実際には相模の古族の出の可能性もありか。」

<http://shushen.hp.infoseek.co.jp/keihu/sizokugairan/ootomo-k.htm>

波多野は大友氏の母方姓である。

大友氏は相模波多野の大友郷に入って大友を名乗る。今の神奈川県秦野市。